

Queequeg のしるし他

前 田 禮 子

Moby-Dick の第 XVIII(18)章の '*His Mark*' では、Queequeg の印形ともいべき記号について語られている。この記号には二種類あって、一つは初版にもとづいて編集されたと言われる Feidelson 版に載せられているもので、これは、十字架のような形をしている。他は、定本であるとされている H. Hayford 氏による *Northwestern U. and Newberry* 版に見られるもので、無限大記号のような形をしている。Queequeg が記入したのは、おそらく、後者の単純で書きやすい方の、無限大記号のようなものであったろうが、いずれにせよ、なぜ Queequeg がそのような記号を書いたのかについては、なにも語られていない。しかし理由はあるはずで、十字形と無限大記号のいずれにも当てはまる根拠があるものと考えて、その理由を推しはかってみる。

まず、すでに、第 II 章 '*Spouter-Inn*' で Ishmael は、Queequeg の刺青の文様について、つぎのように説明している。

1. ... he turned round ... when, good heavens! what a sight! Such a face! It was of a dark, purplish, yellow color, here and there stuck over with large, blackish looking squares ... black squares on his cheeks. (47)

2. Meanwhile, he continued the business of undressing, and at last showed his chest and arms. As I live, these covered parts of him were checkered with the same squares as his face. His back, too, was all over the same dark squares, ... he seems to have been in a Thirty Years' War, and just escaped from it with a stickingplaster shirt. Still more, his very legs were marked, as if a parcel of a dark green frogs were running up the trunks of young palms. (49)

1. 2. の引用から、Queequeg の顔や体には、一面に、四角い膏薬が貼られているように見えるのが、また、両足には、これも一面に、蛙が這い登っているようなものが刺青されているのがわかる。このことから、顔と体の文様は、Feidelson 版に見られるような四角い、十字形をしており、脚のは、Hayford 版にあるような、丸いもの、ということになる。また、それらの色が黒ずんでいるのは南海の大洋で日焼けしたためだろう、などと四角形や円形が、太陽と関係があるかのように示されている。

Queequeg の印形がこれらの図形を記号化したものであるのは言うまでもなく、‘*His Mark*’ の章から、関連があると思われる個所を拾ってみる。まず、Peleg は、Queequeg に呼びかけて、Quohog と言うが、それは、Nantucket に見かけられる Quohog という蛤 (clam) (Feidelson 注) と、Queequeg の発音がまぎらわしいために、取り違えられたという印象を与える。そればかりではなく、Queequeg の脚の文様が蛤の形に似ている、と示唆されているためでもあるだろう。そのように考えると、Queequeg の印形は、蛤に似た丸い無限大記号であることになる。それでは、なぜ無限大記号でなければならないのか、また、Feidelson 版では、なぜ四角い十字形になっていたのか、その理由についても考えてみなければならない。Peleg は、Queequeg の名をさらに呼び違えて、Hedgehog、とも言う。

3. We must have Hedgehog there, I mean Quohog, in one of our boats... (129)

Hedgehog と Quohog とは、語呂合わせになっているので、言い違えたように見えるが、そんな理由だけで使われている語ではない。

Hedgehog も、Quohog も、Queequeg の刺青の文様を示す語であるにちがいない。Quohog は、Nantucket の蛤であるから、第 XV 章の ‘*Chowder*’ で、“Clam or cod?” と Hassay のおかみさんが問うほど、儀式的行為としての意味をもっていたことであり、Hedgehog も、そのかたちから類推できる概念を含んでいる。Hedgehog は、はりねずみ、あるいは、やまあらし、など、放射線状のかたちを示唆している。十字形も、四芒星であるから、放射線状のもの一種と言える。

ほかに、Queequeg の刺青の文様を推しはかることのできる言及が、第 IV 章 ‘*The Counterpane*’ にもあって、それは、つぎのようなものである。

4. Upon waking next morning about daylight, I found Queequeg’s arm thrown over me in the most loving and affectionate manner. You had almost thought I had been his wife. The counterpane was of a patch work, full of odd little parti-colored squares and triangles, and this arm of his tattooed all over with an interminable Cretan labyrinth of a figure, no two parts of which were of one precise shade — owing I suppose to his keeping his arm at sea unmethodically in the sun and shade, his shirt sleeves irregularly rolled up at various times — this same arm of his, I say, looked for all the world like a strip of that same patchwork quilt.

Indeed, partly lying on it as the arm did when I first awoke, I could hardly tell it from the quilt, they so blended their hues together, and it was only by the sense of weight and pressure that I could tell that Queequeg was hugging me. (52)

ここでは、汐吹き亭の宿で朝目覚めたとき、Ishmael は、Queequeg の腕の刺青の絵柄と掛け布団の刺し子の図柄がまったく同じであったと言う。そのようなことは偶然に起きるはずがなく、汐吹き亭は入信儀式の場として設けられているらしく、そうしたこと

からも、この図柄がどんなものであったのか、推しはかることができるだろう。引用文によると、図柄は、色彩に濃淡のある四角形や三角形であり、クレタの迷路のように連続している。図柄は、おそらく、普遍的なものにちがいない。刺し子模様に縫い上げることができるものにちがいない。また、引用文に強調されているのは、これらの図柄の濃淡が著しいことである。ここには、Queequeg の腕と掛け布団の図柄が朝日に輝くさま、また、図柄自体が in sun and shade に千差万別の陰影をもち、日焼け、といった太陽の作用を示していることなど、太陽との関連が示唆されている。

‘*Conterpane*’ という章題に、瓜二つ、という意味が含まれているように、図柄は、太陽に関係して普遍的に存在するものであり、太陽の動きに関するなんらかの特徴が写し取られ図像化されたものであるだろう。

Queequeg の刺青のその象形模様については、次のように記されている。

5. With a wild whimsiness, he now used his coffin for a seachest, and emptying on to it his canvas bag of clothes, set them in order there. Many spare hours he spent, in carving the lid with all manner of grotesque figures and drawings, and it seemed that hereby he was striving, in his rude way, to copy parts of then twisted tatooin on his body. And this tatooin had been the work of a departed prophet and seer of his island, who, by those hieroglyphic marks, had written out on his body a complete theory of the heavens and the earth, and a mystical treatise on the art of attaining truth, so that Queequeg in his own proper person was a riddle to unfold, a wonderous work in one volume; but whose mysteries not even himself could read, though his own live heart beat against them; and these mysteries were therefore destined in the end to moulder away with the living parchment whereon they were inscribed, and so be unsolved to the last. And his thought it must have been which suggested to Ahab that wild exclamation of his, when one morning turning away from surveying poor Queequeg — “Oh, devilish tantalization of the gods! (612)

Queequeg は、彼の体に描かれた文様を、今では seachest として使っている coffin の上に、丹念に彫りこんで写していた。彼は、自身の生命の終わりに近いことを悟り、真理が象徴されている文様を残そうとする。終章で、Ishmael が生き残るので、それとともに、この文様も消滅をまぬがれることにはなる。文様は、奇妙な形や線からできており、Queequeg の出身の島の、今は他界した、予言者で覚者であった人によって描かれたものである。これらの象形文様は、天と地の法則を示し、真理に到達する方法についての神秘が象徴されている。そこには、Moby Dick についての情報も含まれており、Ahab は、これらの謎を解き明かしているのだろう。

Ahab にとって、Moby Dick と対峙することが、秘儀参入の条件であり、その方法がタウロスの迷路のような Queequeg の刺青模様から判読できるものだとすれば、まず考えられるのは、太陽の軌跡と、それによって生ずる地上の季節との関係である。上述の引用文の周辺には、多くの、太陽への言及あるいは示唆があって、Queequeg が所有する

Yojo という名の偶像神が真っ黒なコンゴ黒人のようであると書かれている。コンゴには、赤道が通っている。また、コンゴから近い海上には、赤道と黄道の交わる点があり、その海上点から太陽は、赤道を通過して上昇軌道に入る。その海上点は、経度緯度ともに0度の春分点である。

Pequod 号が Moby Dick と対決して、海上から没するのが、黄道がふたたび赤道を通過し、地平から下へ潜るように見える秋分点であるのを考えるとき、太陽の軌道に相当する何かが Queequeg の体に刻まれていても不思議ではない。太陽の軌跡は、日時計として、さまざまな形で表され、丸や四角や放射線状など、また、合わせ貝の、蛤の形をした、無限大記号のものもあり、Peleg 船長が、Quohog (蛤) や Hedgehog (はりねずみ) などと呼んだのがうなずける。

5. の引用文には、Queequeg の体が解き明かされるべき一巻の書物であり、その秘密は、羊皮紙ともいうべき彼の肉身とともに滅びて未解読のままに終わる運命にある、と書かれている。Ahab は、Queequeg の体を眺めて、“Tantalization of gods!” と言って、慨嘆する。Tantalization とは、ギリシャ神話のタンタロスの受けた苦しみを言うが、欲しいものを目の前に見せつけられながら、手を伸ばすと遠ざかってしまう状態をあらわす。Queequeg の刺青を見て、Ahab がそれを神々によって示された Tantalization であると言うからには、そこには、Ahab が切望し、手が届きそうに見えて、しかも結果の不確かなものがあるのだろう。そこには、確信と不信のあいだを揺れ動く Ahab を駆り立てるものが描かれているのだろう。太陽の不可蝕性や永遠性が、Moby Dick を媒体として得られるとでも言うのだろうか。Moby Dick と太陽が同一性を共有しているかのように思われるのは、Pequod 号が、日本の南の近海まで北上して、そののち南東へ進路をとっているためである。Pequod 号の進路は、台湾あたりから顔をのぞかせる黄道に沿って赤道まで続いている。Moby Dick が黄道に沿って進むと Ahab が判断したからであろうが、そういった知識や記号や象形が Queequeg の文様に描かれていたのではないだろうか。

Pequod 号は、以前の航海で、日本の近海、四国あたりで台風に会い、三本とも帆柱が折れてしまい、日本で新しく帆柱を取り替えたことになっているが、‘His Mark’ でも、この事件について言及されている。日本との関連で考えるのは、やはり、黄道が日本の近くの南の海上を走りはじめ、ひたすら赤道と日付変更線との交点へ向かうからだろう。90度の夏至線から南下していた太陽は、台湾の東あたりで海上に出て、東南の方向に走っている。日本の南には北回帰線があり、Pequod 号は、太陽の道に沿って走ることになる。Ahab が考えている鯨の道は、季節による周遊という概念をはるかに超えて、太陽の道と一致しているのである。第 LXXXIII (83) 章の ‘Jonah Historically Regarded’ で、ヨナの鯨が三日の行程でアフリカ大陸を一周したことになる、と述べられてい

る。海上を行かずに大陸の地下にある鯨の道を通って近道をしたのだらうと、冗談のように書かれているが、ここでも考えるのは、黄道がアフリカ大陸を横断していることで、やはり、太陽と鯨の道が同じであるかのような設定が感じられる。

‘His Mark’には、太陽に繋ぐ、という意味の喩えが見受けられる。一つは、Queequegが海面の浮き油の一点を鯨の目にみだてて、それに引き綱のついた銛を射当てるときである。また、次の文にあるように、

6. ...“We all belong to that; only some of us cherish some queer crotchets nowadays touching the grand belief; in that we all join hands”. “Splice, thou meanst splice hands”, cried Peleg, drawing nearer. “Young man, you’d better ship for a missionary, instead of a fore-mast hand; I never heard a better sermon — why Father Mapple himself couldn’t beat it, ...” (128-9)

手をつなぎ合わせる、という言葉に別の意味が掛かっているようである。鯨の目にみだてたものに引き綱をつなぐ、という喩えをさらに敷衍すると、太陽に紐をつなぐ、あるいは、軌道を紐のように引きずった姿の太陽、などの意味も含まれていると言えなくもない。黄道は、太陽が毎日通過するある地点を、数珠玉をつなぎ合わせるように、連続させてとらえたものである。黄道には、点と点を繋ぎ合わせる、という概念が含まれている。6. の引用文では、手と手をつなぐ、という喩えを用いて Ishmael は宗教について論じている。まず、Ishmael が、手をつなぐ、の意味をあらわすのに、join hands to と言ったのにたいして、Peleg は、splice hands であると言い直している。splice には、糸を撚る、や、結婚させる、などの意味があって、join よりも強い表現である。また、hands に似た語として、crotchets が使われている。この語は、queer crotchets、奇妙な考え、という表面上の意味をもつが、本来の crotchet の意味は、小さな鉤型のもの、や、カギ針などの編み道具、などである。また、上の引用文のすぐあとに続けて Peleg が、“By the great anchor, what a harpoon he’s got there!” と言う。anchor も harpoon も鉤型をしており、splice や crotchet と対になった語である。これらの縁語は、白い鯨に繋ぐ、という意味をあらわすとともに、根底には、太陽に繋ぐ、という意味をもつだろう。普遍宗教について Ishmael が語り、また、Peleg がそれに対応するやりとりの中に、こうした白い鯨を追う物語の根本にかかわる意義が暗示されているために、Peleg は Ishmael に、Father Mapple より説教がうまい、と言う。次の文の、ボタンと撚り糸、は、太陽と黄道を象徴する喩えとしてとらえることができる。

7. Bildad said no more, but buttoning up his coat, stalked on deck, where we followed him. There he stood, very quietly overlooking some sail-makers who were mending a topsail in the waist. Now and then he stooped to pick up a patch, or save an end of the tarred twine, which otherwise might have been wasted. (131-2)

Bildad はそれ以上語らず上着のボタンをはめて甲板を歩きはじめ、Ishmael たちもそ

れに従った。Bildad は立ち止まって中央甲板で横帆をつくろっている帆繕いたちを眺めやっていたが、ときどき屈んで、布切れとかタールを塗った撚り糸の端切れとかを無駄にならぬように拾っていた。この文の、Bildad が拾わなければ無駄に捨てられたであろう撚り糸の端切れ、というのは、人々が見過ごすかもしれない断片をつないで一筋の論理を見出していく、という意味をもっており、太陽のある特定の時刻の、点ともいうべき日々の歩みをつないで見出す太陽の道、としての意味も含んでいる。この文の英文は、二つのセンテンスからできており、文尾で、in the waist と have been wasted となつて、脚韻をふんでいるし、すぐまえの a top-sail も、視覚の上では同韻といえるだろう。Bildad の胴にとめられた一つのボタン、や、さもなければ無駄に捨てられたであろう、など、この文の象徴としての意味を見過ごすべきではない。太陽はしばしば、眼、としてあらわされるから、Bildad のボタンも、太陽を示す一つの象徴記号のようなものだろう。

太陽と、紐をひきずったかの太陽がえがく黄道は、Queequeg が鯨の眼にみたてて射当てた海面上の一点と彼の鉤が引きずる綱と、平行になっている。Pequod 号が沈んでいた位置が、すでに述べたように、赤道と黄道と、そして、東経180度線とでつくる三本の線の交点であるのを考えると、Queequeg が幻の太陽ともいうべき水面の一点を射た行為は、通過儀式としての意味を十分にもつと同時に、Ahab が白い鯨を追う行為の中に隠された秘儀としての意味をあわせもち、また Ahab の旅の成否を占う前兆ともなる。紐という概念は、仏教では重要な概念であり、Melville がそういったことを意識していたかどうかはさておき、太陽に縁を結び、その死と再生にあずかる、という Ahab の旅の目的が、Peleg と Bildad による些細な行為の中に透かし出されていると思われるのである。白い幻の鯨とそれに繋がれた引き綱は、太陽と黄道の象徴である。ところで、Peleg という名は、peel と leg とからなり、Ahab の、鯨に奪われた脚、が掛けられているのは明白であり、Bildad という名も、ヨブ記の長老の一人から引かれたものである。Moby-Dick は、ヨブ記の、神がヨブに問うた質問にたいする一つの答えとして書かれた、という Melville の意図が、'His Mark' の中で表されている、と思われるのである。

Bildad の胸のボタンと彼が拾う撚り糸の端くれも、同じ脈絡のなかでとらえるべきだろう。太陽の軌道にしたがって沈むためには、同じく黄道に沿って、太陽の季節の動きにしたがって進むと Ahab が想像するところの白い鯨に紐を結び、それに引かれて沈むという儀式的成就が不可欠である。白い鯨は、太陽と並列の関係にあり、美しさと厳しさをそなえている。白い鯨は、Ahab にとって、雲のような、海に浮かぶ乗り物である。Ahab は、Moby Dick の動きを示すとおもわれる文様を Queequeg の体に認め、その謎を読み取ったと確信はするが、破局の彼方にあるはずの救い、という秘儀としての隠れた意味については、運命の神々によって誑かされるのではないか、という不信がある。

ギリシャ神話の予言や神託には、そのような背信の疑念を起こさせるものがある。それが、“Tantalization of gods!” という言葉にある Ahab の想いであるだろう。太陽が軌道を引きずって動いているかに思われるのと同じように、鯨も白い航跡をひきずって秘密の道へ案内している、と言わぬばかりに、ヨブ記のなかの、次の句が‘EXTRACTS’に引用されている。

Leviathan maketh a path to shine after him, one would think the deep to be hoary. (41: 52)

「巨鯨、己が後に光る道を遺せば、淵は白髪をいただけるかと疑われる」(kjv)となっている。白い鯨が白い道を残しながら進むというのは、太陽が天空で黄道上を運行するさまが地上に投影されたものとして、たがいに相対応する関係であるとみなすことができる。

‘His Mark’の次々章の第 XX 章(20)の‘All Astir’で、Bildad の妹である Aunt Charity が登場するが、この女性と Queequeg との、神話としての、関わりについて述べたい。まず、Bildad と Aunt Charity は、あたかもギリシャ神話の Zeus とその妹 Demeter を原型とするかと思われる。Demeter は、農業、結婚、社会秩序の女神であり、ローマ神話の Ceres にあたる。また、十二星座のうち、麦の穂を持つ乙女座であるとされている。Aunt Charity は瘦せた老女であるが、それは、Demeter が老婆に扮して Eleusis というところで乳母をしていたときの姿である。‘All Astir’の Aunt Charity の姿を眺めてみると、

8. But it was startling to see this excellent hearted Quakeress coming on board, as she did the last day, with a long oil-ladle in one hand, and a still longer whaling lance in the other. (138)

出帆の日にこの心優れたクエイカー教徒の女性が、片手に長い鯨油柄杓を、他方の手にさらに長い捕鯨槍を持って乗船してきたのは、はっと息をのむ壮観であった、と書かれている。Demeter は、ホメロスの『Demeter 賛歌』には、黄金の剣を振るい輝く実りをもたらす Demeter (第 4 行)として、また、輝く贈り物を手にもち、季節を導く神(第 54 行)として書かれている。

9. Chief among those who did this fetching and carrying was Captain Bildad's sister, a lean old lady or a most determined and in defatigable spirit, but withal very kind hearted, who seemed resolved that if she could help it, nothing should be found wanting in the Pequod, after once fairly getting to sea. (137)

Aunt Charity は、毅然として、忍耐づよく、それでいて親切な人で、いったん力を貸そうとしたからには、船がはるか海上に出てしまってから、不足のものが何一つないようにしなければならぬと固く決意している様子だった、とある。それは、Demeter が Demophon を養育しながら、Metaneira に仕えていたときの姿である。

Pequod号が出発する季節は、暗い冬の訪れのさなかであり、ギリシャ神話では、Demeterの娘のPersephoneが地下の国にとらわれていたときのことで、Demeterが乳母としてDemophonの養育に励んでいた時と一致する。Demeterは天帝Zeusの妹であるが、Bildadも、太陽を象徴するボタンを胸に着けているのと、Bildadという名が、Builder'dとも発音できて、創造者、建築者、大工として、などの意味があり、船主として、Pequod号にとっては、もっとも権威ある者、神かZeusのような立場にある。このような構図を理解するとき、Aunt CharityとBildadのPequod号にたいする関係が明らかになり、さらに、Aunt CharityとQueequegの関係が、次のように成り立つのが読み取れる。

DemeterはDemophonを不死身にさせることができなかつたので、かわりにDemophonの弟のTriptolemusを選び、翼をもつ竜が曳く馬車を与え、Demeterの使者としての役を命じる。Triptolemusの使命は、穀物の種子を持って世界をめぐり、その蒔き方や刈り取りの方法を伝えることであつた。若い王子は喜んでその役を引き受け、豊穡神Demeterの誉れを広く高めた、と伝えられる。Queequegがある島の王子であるとされているが、それとともに、次の理由によって、Queequegは、ギリシャ神話の、その王子を原型としていると思われる。

第XXII章‘*Biographical*’で、Queequegは、次のように言つたとされている。

10. For then once, however, he proposed to sail about, and sow his wild oats in all four oceans. They made a harpooneer of him, and that barbed iron in lieu of a sceptre now.
(90)

「だがいまのところは、しばらく船乗り家業を続けて、四つの海を股に掛け、道楽をやってみるつもりだ。銛手に仕立てられた身にとって、あの鉤型の鉄が当分は笏杖の代わりだ」となっている。sow wild oatsは、放蕩する、という意味の熟語である。しかし、放蕩する、は、この文を軽く考えたときの意味であつて、Queequegの本質を理解するとき、種子を播く、という、この語句が本来もつ字義どおりの意味が隠れていることになる。

また、‘*His Mark*’で、Bildadは、Queequegに、“Son of Darkness”と呼びかけて、

11. Spurn the idol Bell and hideous dragon;... (130)

と言う。「闇の子よ、偶像の魔神恐ろしい竜を見捨てよ」というのが、表面上の意味であるが、spurnには、拍車をかける、蹴る、などの意味がある。Bellは、ダニエル書の偶像についての言及であるのは言うまでもないのだが、Bellの綴りには、lの文字が一つ余分に付いている。Bellは、鐘状の花房、稚穂状のもの、など、Demeterのもつ麦穂や穀物の種子と関わりをもつ。idolには、寵児、大切なもの、という意味もある。上の文には、穀物の穂を打ち振りながら、竜の乗り物に拍車をかける若い王子の姿が見える。このよ

うに解釈すると、Queequeg の言う「あの鉤型の鉄が錫杖の代わりだ」が、生きてくる。Queequeg にとって、種子を播き散らす、とは、いうまでもなく、彼が仕止める鯨の汐吹きと飛沫とである。

Demeter は、生と死を司る地母神と考えられ、その信仰は、入信者にのみ死後の救済を約束する密儀宗教であり、Eleusis の密儀として広く知られていた。穀物の実りを司る地母神が、その技能を広くあらゆる生物の生死全般にまで及ぼすのは当然であり、ここから、生命が発生し、また帰る地下の世界（冥界）を治める神との密接な関係が生じる。ギリシャ神話では、この地母神は母 Demeter と娘 Persephone とに分身しており、もっぱら娘のほうが、誕生、死、復活、をくりかえす自然界の生命の一年の周期を体現する神となっている。

Ahab が求めているのは、この Eleusis の密儀であるだろう。Queequeg の体に描かれている、いわば、象形文書も、Eleusis の密儀についてであろう。「女神は Triptolemus に祭儀の執り行い方を教え、また Triptolemus と一同に、密儀を明かした。これは、聴くことも語ることも許されぬ、侵すべからざる神聖な密儀であり、神々に対する大いなる畏れが声を閉じこめてしまう。幸いなるかな、大地に住まう人間の中でこの密儀を眼にした者よ。参入を許されず、祭儀に与れぬ者が、死して後、闇覆う冥界で同じ定めにと与るべくもない」(472-482行)

Ishmael が言葉をにごして語ろうとしない理由は、このあたりにあるだろう。

Bildad と Aunt Charity が出発前の Pequod 号を取り仕切るのは、次の典拠によるだろう。「尊い女神 Demeter は教えをすべて告げ知らせると、娘神とともども Olympus へおもむき、他の神々の仲間に加わった。そして、ここで、稲妻 Zeus のかたわらに暮らし、畏れ敬われている。いとも幸いなるかな、大地に住まう人間の中で、このお二方に心から愛でられる者よ、その者の大いなる館には、Pluto が竈の神として直ちに遣わされ、その手から富が、死すべき人間たちにあたえられる」(483-489行)

Persephone がさらわれるのを単眼の Helios が目撃しているのだが、この場合の Helios は、太陽を眼としてとらえている。Peleg が Queequeg の眼をのぞきこんで、“For eye”「こりゃ驚いた」、と言ったり、単数形で、“Mind your eye” (136)「いいかね」、と言うなど、太陽と眼との同一性が明らかである。Bildad が Queequeg を、‘Son of Darkness’「闇の子」と呼ぶとき、その闇は、日焼けした皮膚の色であり、Negroid の色であって、また肥沃な土壌の色であることになる。

参照 『ホメロス賛歌—四つのギリシャ神話』逸見喜一郎・片山英男訳（岩波文庫）

使用テキスト *Moby-Dick or The Whale by Herman Melville ed. by Charles Feidelson,*

Jr. (Bobbs Merrill 1964)

ヨブ記の伝播——ヨブ記と三教指帰——

空海の入唐以前の作とされる〈三教指帰〉(以後括弧を省く)は、入唐以後の作である可能性もあり、書かれたのが入唐以前か以後かは不明である。いずれにせよ、三教指帰の構成とあまりにも似た資料が、旧約聖書のヨブ記である。八世紀に書かれた三教指帰と紀元前にはるかに遡って伝えられるヨブ記とでは、空海が何らかの理由で影響を受けたと考えるのが妥当であり、それ以外には考えられないのである。それほどに、三教指帰とヨブ記は著しく共通点が見られるのである。

ヨブ記では、ヨブと三人の長老とが議論を交わしている。長老の一人がヨブと議論を一段落させると、続く他の一人の長老が代わってふたたびヨブと一対一の議論を始める。議論が一巡するとふたたびもう一巡ヨブと長老との議論が交わされる、という形式になっている。長老たちは、自分が正しいと主張するヨブを説得してその意見をかえさせることができない。長老たちは沈黙してなすすべもない。そのとき、それまで黙って聞いていたエリフ(Elihu)という名の若者が進み出て、ヨブの誤りを指摘する。この若者は預言者であって、創造主の言葉を代弁するのである。創造主もつむじ風の中から現れて、エリフの言葉を肯定し、さらに続けて自然の逆らいがたい猛威について語られるのである。そのとき、空の鳥について、地上の動物について、また海の生物について語られるのである。

三教指帰の構成でも、同様に、五人の登場人物がいて、物語形式になっている。兎角先生が主人役になって、その邸宅に三人の客人を招く。儒教を説く亀毛(きぼう)先生、道教を説く虚亡(きょぼう、あるいは虚妄)隠士、そして仏教の教理を説明する仮名乞児がその客人となり、兎角氏の甥のやくざな蛭牙公子を諭す構成になっている。

亀毛というのは、毛の生えた亀であるから存在しない生き物である。しかし藻を引きずっている亀は存在するし、道教では長寿の象徴として尊ばれている。虚亡隠士の名の虚妄からは、虚空が想像され、この名が、空を飛ぶ鳥の朱雀をあらわしていると考えられる。仮名乞児は、名を捨て乞食をしながら修業する仏教僧であるのはあきらかである。蛭には牙はなく、低く取るに足らないものとして、兎角公の母方の甥である放蕩児は、蛭牙公子と名づけられたのだろう。兎に角は無いので、兎角という名も、存在しない動物の名として付けられたと考えられている。兎は、大きな耳を垂らしているが角がないのは事実である。しかし、次のように考えたい。

兎は、月に住んでいる月兎として、仏教の図像では月を象徴している。月の女神は東に向かって差し出した片手に丸い月球を持ち、その球の中には兎が座っている。また、月暦の二十八宿では、東を表す七宿のうち、角宿は最初に来る。月神の描かれた図像は、いつも画面の向かって右を見ている立像である。右は、陰陽五行の算法では、東をあらわしている。したがって、月神は、東を向いた立像として図像化されて定着している。その立像は、背部をやや曲げた細身の女性であって、三日月の姿を示しているとおもわれる。三日月は西空に現れ、太陽のあとを追いかけて、すぐ沈んでしまう。女神が望み見ている東は、満月が、地球をはさんで、太陽と東西に対峙する方角である。とくに、春分点と秋分点にあっては、沈む太陽と昇る満月が、正方向の東西に、向かい合う姿を見ることができる。この日が祭祀にとって重要であるのは、洋の東西を問わない。したがって、兎角という名には重要な意味がある

ことになる。

虚妄隠士が朱雀であるとおもわれる暗示が本文中にある。彼は、脚の細いのが正常であり腫れ脚うんぬん、と書いて、脚に言及している。朱雀は、いうまでもなく細い脚をしているからだろう。また、つぎの言及も、空を飛ぶ身ならではのものである。隠士は、くかげろうのような短い命を、鶴や亀のように長生きし、足の不自由な驢馬のようなおそい足を、翼のある竜のように速く走れるようにしてあげよう。日、月、星と一緒に存命し、八人の道士と向かい合い、朝から渤海のなかの三つの神山の白銀の宮殿で終日ゆったりと遊び、暮れ方から渤海の東の五岳の黄金の宮門を通過してよもすがら逍遙できるようにしてしんぜよう、という。また、仮名乞児も、く亀毛のかもの足もかならずしも短いとはいえないし、隠士の鶴の足も長いとはいえない、と書いてるので、隠士が朱雀であるのはあきらかである。

仮名乞児は、蛭牙公子を正しい道に立ち返らせようとして、仏教を説くのであるが、その仏教は、空海が説くのであるから、いうまでもなく、密教としての仏教である。空海自身が仮名乞児の名をかりて説いているのであるが、風采からみるかぎり、乞児も神話のなかの人物としてえがかれている。それは、密教発祥地のインドの神話から引かれた、月に住むという想像上の人物の姿としてである。

仮名乞児の論は、三教指帰の巻の下に書かれてあって、1) 懐 (おもい) を写す、2) 無常を観ずる、3) 生死の海、4) 三教を詠ずる、からなっている。乞児の風采は、つぎのとおりである。

く黒髪をそり落として、頭はまるで銅の甕のようであり、うるおいはなく、顔は土鍋のようである。顔はやつれ、風采はあがらない。長い脚が骨ばって、池のほとりの鷺の脚のようであり、短い首は筋張って、まるで泥にまみれた亀だ。五つに割れてつぎ合わせた木鉢を入れる袋は、牛の餌袋のようにいつも左のひじにかけている。…草で編んだ座具をいつももっているから、…縄張りの椅子を背負う…口のかけた素焼きの水瓶は油売りの肩ほどによごれている。環のとれた錫杖はかえって薪売りの杖に似る。鼻筋がまがり、眼がくぼみ、おとがいは尖り、眼は角ばっている。ゆがんだ口に鬚がなくて子安貝のようであり、口は三つ口で歯が抜け、すばしこい兎の唇のようである。>

乞児は、顔は兎のようであり、満月のようであり、欠けた三日月のようであり、妙な道具を携えているのだが、彼は、月に住み神酒をつくといわれる月男であるにちがいない。携えている甕は、神酒を入れ、棒切れの杖は、かきまわすためのものだろう。縄梯子は、月と地上を行き来するからだろう。月男は、復活を司るといわれている。人のからだは、死後に陰陽五行の元素に分解されて、重いものは土に返り肥料となり、軽いものは霧や雲になって月へ行き、雨や霧になって地上に帰り、ふたたび命になって甦るとされる。月男のつくる神酒はソーマといわれ、月男自身もソーマと呼ばれもする。

空海の密教は、季節の循環と密接な関係がある。登場人物たちは、儒教や道教の神仙をあらわしているばかりではなく、亀は玄武として北や冬をあらわし、朱雀は南や夏をあらわし、兎角公が満月として東をあらわしている。東は春の方角であり、春の満月は豊穰をもたらす復活の象徴である。乞児も、東西に移動する月の位相を示している。しかし、乞児は、とくに、秋として、夕陽の沈む方向、無量寿無量光仏の住する西方、Amitabha (阿弥陀仏) が主宰する極楽世界の方向を示している。西は新月の生れる方向であり、このとき月は、太陽と地球のあいだに位置し、地球の影にかくれて見えなくなる。あたかも太陽 (天) と地球 (地)

Queequeg のしるし他

の交合によって孕まれるかの姿となる。西もまた復活の準備をする方向として祭祀において重要とされる理由がある。

参照 『空海全集』（筑摩書房）
『聖書』（新共同訳）（日本聖書協会）